





門 4  
號 600  
卷 112

15

完  
白  
雄  
麻  
評  
俳諧連歌百韻

月  
女  
打  
塔  
洋

定  
之  
二  
小  
卯

修  
至

弗  
校



五  
桂  
一  
羅  
文  
石  
谷  
風  
為  
強



己の火

詩

本々此巻や

花の宿



浩く清々の極はふ

二詩可角輪の兜のたけ

一ちりされ下緒人少くせられ

一たぬくはけり詠る建場沼

一涼の二階を照る宵の月

一秋をふあは抱きかへる



己 露の世に 獨り坐す 河院をのし 五 結

一 寺すし 慈の 門前 此の 町 全

二 松本 昔の 今の子 系 良の 京 全

一 あり 白 ぬき ささき 百反 一 湯

二 葉 志 ぶさ ぶさ きて 髪 かつ 引 け 全

六 吼 乾 夷 乃 患 ぬ ぬる 生 全

己 浮り 船 渡の 葉も 明 ち あり あり 柳 邊

五 生 八 凱 陣の 沈子 去 案 全

二 神 職の 老 々 浮 文 浮 猫 し 全

一 遠 あり あり 夕 月 の 乾 全

己 翠の 若 小 あり あり 之の 白 秋の 色 桂 風

二 風 の 方 あり あり 住 の 傳 あり 全

己 強ひ たり 河 の 岸 傍 乃 胸 工 全

一 行 たり 坐 あり あり ね たり あり あり 國 あり 全











永 未 日 也 独 結 藤 前 果 似 也

文六

飯 時 皆 了 舟 標 <sup>螺</sup> の 色

五七

舵 羅 舟 行 舟 道 昔 清

全八

中 日 雨 寂 々 又 巾 子 似

全九

音 歌 子 凡 在 け ち 里 内 へ ち

七

賓 客 づ せ ち 舟 子 毛 纏

全八

空 々 々 ぬ 沖 の 内 介 乃 杉 木 之

全九

六 の 茶 散 了 心 義 の 之 風

七

名 衆 舟 交 片 舟 并 八 舟 有 ち

七

玉 簾 深 水 入 活 子 の 玉 簾

七

舟 子 半 帆 舟 子 舟 名 立 舟

七

青 池 諸 舟 流 乃 舟 舟 遊

七

廣 々 々 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

七

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

七







あふむる毒きまの果るま

嘯りて穿雲の傳

余はふやうく既登の秘曲も世を驚

悟の正も佛ころか

滔あきと絶つ女とを東面

踏きしむり瀧流山跡

二 陰は流るる毒きまの果るま

法

式

投

式

式

式

式

子いふやうに

秋の心はあふむるま

栞何しよと月を

あふむるま

あふむるま

あふむるま

あふむるま

法

式

投

式

式

式

式

子いふやうに

秋の心はあふむるま

栞何しよと月を

あふむるま

あふむるま

あふむるま

あふむるま



乳世の象小半里の糧ハあると

足跡あると紙の砂川

形代了交る花の正跡り後

鳥帽子の目と同立危

中渡子福とあひ控り

僕まゝ入せし紙巾の記

花あ人志の英女子似る

似るはしる歌謡者

五十七  
一  
早  
柳  
枝

三



評者 宛來  
志 歎

俳諧連歌百韻

蕨山  
狐搥  
鳥琴

丙辰子墨塔世百四羅文亭自汗  
裝、芍、花、月、花、打、瑠、璃、瓶、各、出、吟、

催主  
四羅文

各十八句











乳ノの香の梅ノもノ也

そとくノ香のノもノ也

急坂ノくノの切ノ岩ノ也

任ノのノ也ノの馬ノ也ノ汗ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

文

也

也

也

也

也

也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

山ノのノ也ノの山ノ也ノ也

文

也

也

也

也

也

也



くさくさおのり田小葉合温敷

六 以何千一傍とやんはゆち

草花桐葉書の大木の斤取

二 眠身何人百合小葉書

一 川の子小葉と葉とよあたり

二 思ひやうるぬき平葉文

一 乃れろ柄移く縮固はかり

七 花

六 山

八 花

七 文

七 文

九 文

七 花

一 二 三 山乃雪とあま

一 善き年一宮能くあつの子をかく

一 鼻のつゝ鼻の揺るぬつ

一 瘧りとくくくくくくく

一 二 三 ちんちんちんちんちんちん

一 二 三 湯湯湯湯湯湯湯湯湯湯

一 二 三 湯湯湯湯湯湯湯湯湯湯

七 山

九 葉









釣人の糸糸指くあやめ草  
らまきりきえぬしきりきり  
らねんやかありくのたね  
かともまをのきき推の松  
月或るる金造りふたのひき  
ゆきりり候のちねにしき  
城をくりもの声の小室を

たま 小物  
たま 小物  
たま 小物  
たま 小物  
たま 小物  
たま 小物

お敷のちりり 接のちりり  
かひり氷くはりりり  
或るるありもはりりり  
ままのちりのちりのちりり  
後かちりりりりりりり  
元のちりりりりりりり  
ささちりりりりりりり

たま 小物  
たま 小物  
たま 小物  
たま 小物  
たま 小物  
たま 小物



若教乃お国あ所まよりの

猫も鷹も玉草子トリスラ柳ヤナギ

十六の羅漢シテあしく肉ニク屠トれ

菊キクくクあしくシテ唐カラ内ウチさるル

人考ヒトカウのノまマあアのノ法ホウをヲ年ネンのノまマ

家イヘもモ取トル乃ノ金カネのノ竹タケ火ヒ

蛇ヘビ乃ノ心ココロ也ヤはハもモ天アメ海ウミのノ我ワをヲまマ

馬ウマ平ヘイ交カウもモあアり

道ミチ乃ノ少シウ礼レイ走ソウるル 殞イン

大オホ生シ解ゲのノちチ不フちチもモ

只ヒト鼎テイ之ノ味ミのノおオ魚イサのノ海ウミもモ接ツキれ

吳ウ乃ノ解ゲもモあアりシてシ水ミヅのノ水ミヅ

志シ乃ノ解ゲもモあアりシてシ水ミヅのノ水ミヅ

一ヒト乃ノ解ゲもモあアりシてシ水ミヅのノ水ミヅ

山

地

文

法

書

心

馬

道

大

只

志

一







判者 嵐亭  
并樂評蛙水

佛指連騎百韻

孤遊

羅文

西展四月二日曲亭園苑

春八句在月夜抄寫執筆出

催主

各序在九句

馬琴



蛙あはれ

春興

蛙あはれのこころは  
こころをこころに  
か

乙五

のさうや地ふも

曲多馬琴

衣はかへる層

の番道乃戸雁ひくさ

喉系は鳥帽子のけ緒も

一 次の後平くふ椽板

吹雪はくはあさる好

一 流を介し復の志も

月の名を思ふも

一 物もあはれ



汗、秋ふ、能取長志の、飛鳥川、批、旋

心、新ふ、孔、花の、玉、し、よ、の、庭、馬、琴

患、病も、後、合、款の、甘、菜、の、賣、入、羅、變

力、自、ら、社、入、毎、く、豆、踊、二、纏

卯、の、名、君、白、く、表、後、の、よ、向、草、二、琴

名、の、ま、ふ、語、し、人、鬼、は、な、し、文、二、琴

鄙、唄、ふ、譯、る、り、の、娘、み、く、二、琴

燧、飯、あ、り、ふ、種、一、彩、糸、二、琴

濃、柳、の、給、是、留、く、時、子、く、く、二、文

月、も、初、更、の、時、中、寝、申、二、琴

去、程、ふ、く、花、改、の、肝、の、お、ま、あ、り、二、琴

太、く、け、若、お、の、刻、肩、結、く、二、琴

加、え、ま、ふ、重、い、り、れ、く、も、若、田、雲、二、琴

雉、子、の、お、り、し、も、山、花、の、心、二、琴



斤糸の熟... 泊瀬の糸... 子

... 子

掃ある毎日掃除乃も... 子

... 子

... 子

... 子

... 子

... 子

... 子

... 子

... 子

... 子

... 子

... 子

耳考十八

(五)

七

二

五

三







隱念と暮の遠るの注す

十一 施

吸物 芋煮 楊活 白魚

十二 珍

妹の十三年の川

十三 施

その森の陰に

十四 施

山径の露 榎火

十五 施

世の苦り 新瑞

十六 施

世の苦り 水鏡

十七 施

世の苦り 積り

十八 施

世の苦り あり

十九 施

二廊の志

二十 施

一廊の志

二十一 施

久の山

二十二 施

夕明

二十三 施

眼鏡

二十四 施



老くあはれなきおちりし桐栢抄 十六 旋

堂の能くも梅よ梅よ 十七 文

家物くおの松よ松よ 十八 文

こよ中、後よ蝶行 十九 文

年々祝言忘れよ阿礼あり 二十 文

もや 唯方の鶴よれ帰 二十一 文

五

埋き井の化中をを、若の 二十二 文

むい心湯をく 殿の端 二十三 文

物衣ふ男をまらむの 二十四 文

もいさふよけく 二十五 文

新ふ心く河をいされ 二十六 文

岸の草師の端の 二十七 文

美結の魚よふ 二十八 文

春も蝶よまらぬ 二十九 文



草の葉をみよと隣の花をみよ

十九

坂東常戸の宮大接する年

二十

元まうやうの徳の日の格を認む

二十一

あまのこを常戸の宮大接する年

二十二

養子の世の世の世の世の世

二十三

晴るる日をみよと徳を認む

二十四

子孫の常戸の宮大接する年

二十五

横比の世の世の世の世の世

二十六

秋の世の世の世の世の世

二十七

牛の世の世の世の世の世

二十八

宰の世の世の世の世の世

二十九

令の世の世の世の世の世

三十

紀の世の世の世の世の世

三十一

世の世の世の世の世の世

三十二

世の世の世の世の世の世

三十三



楊 二 ありき 唯乞 一 田心毫

二 よむいぬあし脚 一 の鹿鹿

後 二 ありき 一 五 二 ありき 一

二 ありき 一 ありき 二 ありき 一

毎 七 ありき 一 ありき 二 ありき 一

二 ありき 一 ありき 二 ありき 一

下 二 ありき 一 ありき 二 ありき 一

板 一 の心 二 ありき 一 ありき 二 ありき 一

二 ありき 一

二 ありき 一

二 ありき 一

二 ありき 一

二 ありき 一

二 ありき 一

天 九十一 馬 一 琴 一

地 六十 羅 一 文 一

人 四十 孤 一 終 一

心

羅 孤 終 文



判者 宜變

附不審公也評

月波 能緒牙之席

百員

蘇羅 孤從  
小文

丙辰暮書言八日曲亭與行

表句月七折綴執筆吟

各十八句言

笑生

馬基



夫水評

不審為評

素尺評

曲亭島琴

帆柱也

乃豪の

冬本立

夕洲の去小をそく旅

おきまを九日晦日小沙流もか

浦島坂のあかこり

太刀抱椽の書戸小かお白

石あめふり底の築山

松野亮小鞍をのる五仔の月

刺衣の袖も深液る秋



見妹杉家尺一尺菟尺うら若尺ハ 蕪尺

中尺良尺の湊尺小尺錦尺舊尺門尺 馬尺

巡檢使尺了尺蕙尺の元尺と先尺拂尺 狐尺

道尺吹尺若尺手尺末尺の印尺伏尺 羅尺

後尺法尺の湯尺之尺法尺終尺る夕尺日尺新尺 小尺

鸚尺鵒尺小尺智尺ふ尺う尺か尺い尺子尺の尺唄尺 龍尺

人尺質尺と鬼尺も尺衣尺と尺磨尺め尺 琴尺

す尺又尺奴尺方尺乃尺竹尺の尺書尺風尺 小尺

新尺宅尺も月尺の尺儀尺乃尺椽尺う尺ふ尺 小尺

杭尺小尺冬尺の尺河尺 空尺蟬尺の尺園尺 龍尺

書尺無尺ふ尺言尺能尺あ尺る尺も尺出尺く尺く尺 小尺

雲尺と目尺尚尺ふ尺走尺る尺大尺船尺 龍尺

子尺あ尺ら尺花尺を尺離尺る尺の尺鳥尺 小尺

世尺居尺の尺小尺笠尺ふ尺茶尺搦尺或尺群尺 小尺



いん然〜貝吹〜吹の筆

牛鞘ふらふる白のろろ碑

振羽と袖ふ先乃秦舞陽

〜も尾風ふ榎む并

輝掃の庭ふ却栲の粗急包

深雪の中ふ江戸の白壁

白紙ふふ武門の何連屋々

玉の紙と書〜時智

大造ふ末朝ふ末道伴

増も御簾ふ又ゆる蝙蝠

仕る人さかりふ瓶と道あるし

身ハ〜るまは海の安河渡る川

関ひ〜るふ脱〜月ノ暈

尾七〜る〜似〜振〜糸〜

山

文

琴

籠

文

琴

籠

文

籠

山

文

文

文

文



任成帝の秋惜二山ハの后

定家の意地七の百首七抄ハ

文の帝七史七小吳七又七乃七系七は七る七

皆七若七並七人七る七若七小七和七漕七

幽靈七小七面七目七も七あ七ま七小七和七衣七

無七も七無七常七も七知七と七盤七遠七

風七小七彩七色七元七る七高七雄七山七

月七も七凍七化七る七及七の七胡七糸七

厨七買七を七叱七る七も七客七の七馳七走七婦七

花七の七足七を七る七三七尺七の七鯉七

幻七術七以七誇七る七仁七家七の七古七桂七

去七る七人七如七く七松七風七の七面七

月七も七烟七の七花七香七さ七ハ七や七う七月七

物七又七車七の七履七衣七く七は七

山ハ 七

後七 七

琴七 七

文七 七

盤七 七

遠七 七

雄七 七

胡七 七

婦七 七

鯉七 七

桂七 七

面七 七

月七 七

履七 七



三  
リ  
多丹はし奈良茶と粥南く喜の山

丁海くく急く味く中

形市直く鞠を蹴させるうま情

時針ふきふ楯の目の内

七  
深淵浦の梅垣乃別世界

後波と相む風の治里

虹の輪の中お吹おそ雲の巖

舎くを謝くく徳以立る

乳貫の肌お笑こする魚よる

花のうりおく様一枚

五  
結船ふきふ津裏もまきの音

再考十五  
妹くい新と雲切れの月

世蟹の糸も形乃二ツ星

葛くく草ふ用る印くま戸

山

及

結

山

結

山

結

山

結

山

結

山

結

山



別荘も人をまじりての川向十三

席画の後の具毛禪十二

さし艾四花まゝぬいし神袷十二

僕流まじりてめく物十二

東の宮も和宮へ急ぐ道か十二

梅ふり晴る八朔の風十二

秋の月待をまじりて角力十二

寺の錦と米倉十三

由百度ふとなく舟の先十三

死にる光輝と威を急病十三

又をみ足金ぬした小握十三

繁結あゝ二人十三

木のおもひ花印十三

笑へる山も啼りの十三



万歳も古巣へ海を<sup>シ</sup>神乃石<sup>十</sup>路<sup>六</sup>

糸<sup>一</sup>輕<sup>一</sup>を<sup>一</sup>と<sup>一</sup>の<sup>一</sup>し<sup>一</sup>川<sup>一</sup>留<sup>一</sup>の<sup>一</sup>伽<sup>一</sup>山<sup>十五</sup>

秋<sup>七</sup>ハ<sup>七</sup>志<sup>七</sup>ん<sup>七</sup>と<sup>七</sup>氷<sup>七</sup>る<sup>七</sup>糸<sup>七</sup>籠<sup>七</sup>の<sup>七</sup>忘<sup>七</sup>れ<sup>七</sup>を<sup>七</sup>及<sup>十六</sup>

<sup>五</sup>色<sup>五</sup>ぬ<sup>五</sup>い<sup>五</sup>ふ<sup>五</sup>み<sup>五</sup>を<sup>五</sup>引<sup>五</sup>燈<sup>五</sup>小<sup>五</sup>書<sup>五</sup>琴<sup>十五</sup>

世<sup>一</sup>小<sup>一</sup>融<sup>一</sup>く<sup>一</sup>糸<sup>一</sup>束<sup>一</sup>の<sup>一</sup>深<sup>一</sup>木<sup>一</sup>朽<sup>一</sup>糸<sup>一</sup>多<sup>一</sup>祭<sup>一</sup>山<sup>十六</sup>

杜<sup>一</sup>丹<sup>一</sup>崖<sup>一</sup>を<sup>一</sup>く<sup>一</sup>寂<sup>一</sup>一<sup>一</sup>夜<sup>一</sup>も<sup>一</sup>世<sup>一</sup>絶<sup>十六</sup>

公<sup>一</sup>く<sup>一</sup>井<sup>一</sup>戸<sup>一</sup>の<sup>一</sup>車<sup>一</sup>も<sup>一</sup>迂<sup>一</sup>化<sup>一</sup>注<sup>一</sup>反<sup>十七</sup>

夏<sup>一</sup>腐<sup>一</sup>肉<sup>一</sup>の<sup>一</sup>舟<sup>一</sup>も<sup>一</sup>志<sup>一</sup>河<sup>一</sup>の<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>い<sup>一</sup>き<sup>一</sup>琴<sup>十六</sup>

子<sup>一</sup>母<sup>一</sup>後<sup>一</sup>小<sup>一</sup>淮<sup>一</sup>南<sup>一</sup>王<sup>一</sup>の<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>な<sup>一</sup>こ<sup>一</sup>と<sup>一</sup>々<sup>十七</sup>

悪<sup>一</sup>事<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>虎<sup>一</sup>小<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>多<sup>一</sup>ぬ<sup>一</sup>后<sup>一</sup>法<sup>一</sup>絶<sup>十七</sup>

使<sup>六</sup>の<sup>六</sup>廳<sup>六</sup>小<sup>六</sup>お<sup>六</sup>つ<sup>六</sup>く<sup>六</sup>御<sup>六</sup>州<sup>六</sup>持<sup>六</sup>前<sup>六</sup>山<sup>十七</sup>

ち<sup>一</sup>や<sup>一</sup>九<sup>一</sup>ツ<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>古<sup>一</sup>靴<sup>一</sup>打<sup>一</sup>き<sup>一</sup>る<sup>一</sup>マ<sup>一</sup>

高<sup>一</sup>く<sup>一</sup>啼<sup>一</sup>月<sup>一</sup>を<sup>一</sup>見<sup>一</sup>鏡<sup>一</sup>の<sup>一</sup>本<sup>一</sup>を<sup>一</sup>小<sup>一</sup>虫<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>

里<sup>一</sup>も<sup>一</sup>所<sup>一</sup>に<sup>一</sup>し<sup>一</sup>小<sup>一</sup>妹<sup>一</sup>の<sup>一</sup>ち<sup>一</sup>を<sup>一</sup>く<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>



持扇ヒごの宮乃場

舟を甲斐ヒしき岩ヒし

以ヒ水と叫ヒ船と船

水鷄ヒのくく渡ヒの船ヒ

舟ヒのよれ酒ヒの棧ヒ姫ヒ小寐ヒもヒ

弓ヒのくまヒひヒと由ヒをヒ弓ヒ

八重ヒ一重花ヒを境ヒ乃ヒ下ヒ船ヒ

舟ヒを山ヒ吹ヒと尺ヒのヒるヒ葦ヒ烟ヒ

○天馬ヒ琴ヒ

人ヒ地ヒ羅ヒ文ヒ

△天馬ヒ琴ヒ

人ヒ地ヒ羅ヒ文ヒ

山ヒ琴ヒ文ヒ旋ヒつヒつヒつヒカヒ



通變評

月次第七席

俳諧之連騎百韻

蘆山

孤遊

羅文

是

馬琴

寬政第八年歲在丙辰  
秋七月廿日曲亭興行  
著芳樹各序十八句



宜妻伴

芥萱花

曲者今つる者

関も越

穉乃昏

旅命結曉花麻

撰集結集を月り子とらた

又つ奴長の子集り

まひとる古年此市の

舟跡一廣さしこの合しや

雲の枝千其り

横目千

暑か







太口、九も経より多の果るもく

七 あやふしの義小伽羅所持者

五 歩行よりゆく里のふたねあやふ

八 一より中居る伯父、横宗

二 磨あふ玉田のゆゑも流き羊

三 時時大狸の古おとく

一 稲月、結吉、靴平、旭のこもる

北

北

北

北

北

北

北

七 余をよらうとて此をよむ

つふ濡り、池田、名ゆき、織

一 垣子、葡萄、甘酒、彌南、看

一 野、名、紅毛、紅葉、の、川、の、水

二 おま、結、の、月、平、中、の、月

七 初、命、の、り、の、足、の、馬、等、持、者

一 漢、字、の、成、り、の、成、り、の、成、り

北

北

北

北

北

北







寒く燗を又とくし旅を

七、政はのち日切し一盤

五、美事非のうらむる世を新く

九、泣きし海も立君の志

五、神筆小物のをれり

五、叢も晴く橋はの月

七、以年子流るるを

五、率部母も交る裏町の

五、摘草ふりしと下との番

五、橋たれしをく思の

五、おのちの志ふ又著る

一、海も際立しを湯に

五、朝も交る木多の柳の

五、焚く火の粒の片息

九此

九山

十琴

十山

十山

十山

十山

十山

十山

十山

十山

十山

十山

十山



一 春也いよのまは、朝も薄閑

七 死も離れろ元の患病

二 流も流れぬ心もかたむ

一 流も流れぬ心もかたむ

一 流も流れぬ心もかたむ

一 流も流れぬ心もかたむ

月も月も名も木も

二 松塔に秋も来りぬ

二 女も千たの夜も

一 女も千たの夜も

二 女も千たの夜も

十 女も千たの夜も

七 女も千たの夜も

一 女も千たの夜も

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三



馬ウマ一ヒツ編ヒ成シけケくク舟フネ集ツのノ八ハチ重ジュウ辰チン

七 小コ士シのノ面オモ交カ交カはハはハ脚ケツ成シ

押オシのノ子コのノ種タネ白シロ梅ウメ種タネ

一 誓チカ平ヘイ一ヒツ斗トのノ米コメ炊ヒ湯ユ之シ

今イマ山ヤマのノ人ヒト煎ヒ所トコロのノ螺カタ小コ戸ド

一 鷗ウのノ立タ軸ジク成シのノ段ダン

今イマ様サマのノ意イ也ヤもモ若ニガくクもモ志シ小コ物モノはハ

五 糸イト眼メのノ立タ軸ジク成シのノ段ダン

一 川カハ陣ジンのノとト如ニ多タ如ニ多タのノ日ヒ若ニガくク

八 数カズ珠ジュもモ指サシのノ中ナカのノ油アブ平ヘイ子コ也ヤ

五 舟フネ親オヤのノ粥カ送ツクのノ後ノチのノ後ノチ

二 板イタ屋ヤのノ板イタのノ実マコト板イタのノ実マコト

一 死シ種タネのノ候トキのノ最マシ終マシもモ月ツキのノ最マシ終マシ

一 海ウミ子コのノ立タ軸ジク成シのノ段ダン

十六

十六

十六

十六

十六

十六

十六

十六

十六

十六

十六

十六

十六

十六



二) 後日、湯氣吹く〜窓のち  
十六文

丑) 冠も落さず向ふ元山  
十九文

三) 土居安ら〜紀の路の危難わらわら  
十九文

一) 今、飲の土音替の〜  
十九文

二) 人あ〜師走男結少袖  
十九文

三) 五) ちり〜歌、船の夜中  
十九文

四) 少〜心と幸ふあふ〜の心  
十九文

天馬琴 九十五

地瓶籠

女羅文 七十七



判者完來  
民玉

月次第八年年以毫  
已元旦開

百韻

寅元改丙辰冬十月十二日

東漢唐無所

表、章、外、月、光、打、踏、執、筆、吟

莖至

仙水美人

各十法

孤從  
蘓山  
羅文  
馬琴



完  
来  
保  
民  
玉  
評

○<sup>二</sup>  
桃  
灯  
と  
消  
き  
よ

萩  
光  
乃

玉  
の  
ま  
ま

二<sup>二</sup>  
追  
ひ  
の  
ろ  
子  
を  
展  
む  
人  
声

二<sup>二</sup>  
河  
下  
の  
舟  
を  
た  
り  
と  
り  
と  
り

一<sup>一</sup>  
を  
分  
り  
と  
り  
と  
り  
の  
縁

二<sup>一</sup>  
海  
の  
し  
と  
端  
山  
も  
あ  
ら  
ぬ  
か  
ら

一<sup>一</sup>  
よ  
う  
深  
あ  
ら  
ぬ  
鏡  
十  
反

二<sup>一</sup>  
仕  
組  
る  
躍  
小  
月  
の  
消  
き  
よ

一<sup>一</sup>  
ら  
よ  
き  
く  
松  
枝  
童  
ろ  
の  
か  
ら



五五 秋風の几帳隔るはくく一ひる 蕨山

一力はくくとと解くぬ下紐 楓庭

五四 帆浪小浦の出船乃起こりる 羅文

五二 山よけ晴切るるの遠山 馬琴

五三 岩おれり鐘鐺の鐘音をきこ 文

一四 一鳥空小むくく之界 旋

五五 教書人の貫る海を程粒瓶 文

一利休を招く秋の山中 山

五五 うち群る月小唄くむら鳥 フ

七五 詭行も果る唐門の秋 文

一六 波羅と公家の古風小志をきこ 琴

五四 武士よおげあき弾基の賭 山

一八 見飽せぬる一日の花より 文

一八 百丈入送りの花よおさ殿 フ



久々の衣を縮もまよ乃色

玄蕃の路と笑える夜音

一 昴妙子新詩百遍下戸あふ

杜丹もそえる瑞理の音

身のどろろの布絶の蹟も涙み

一 乙とせは後小部意

風をた隠岐の離宮のむし

書写ふ飽む秋と新少る言

光陰の矢程もひらり眉の如

一 かくる名醫も来迎の世や

紫の雲井東く安車駟馬

一 のこまつ松の庭小浜あり

一 詩書も室九月の新あふ

一 玄目の糸小秋のま日

琴

文

琴

旋

山

琴

々

山

旋

文

旋

琴

フ

フ



七<sup>四</sup> <sup>五</sup> <sup>十</sup> <sup>五</sup>

この宵の隣ふ忍ぶ袖乃露

六  
山

一六 誓語一帳患の 嬢

八  
琴

一<sup>二</sup> あ—雲の大和ふ流るむじし風

七  
籠

一<sup>五</sup> 十二鐘ふあえぬ日時計

六  
文

五<sup>二</sup> 菱腰のうせき群汗糸の原

九  
琴

一<sup>四</sup> 田と懐く 鸞輿洋をる

七  
文

一 任去る言聲と阪陣の奉幣使

七  
山

一<sup>八</sup> 雪散と土ほち板椽の月

八  
文

一<sup>五</sup> 室咲の梅、香包む 餅むしる

八  
文

一 酒を舂く 妖しころる 笠

十  
琴

一<sup>四</sup> 解安ま 樽多の帯乃さしぬと

八  
籠

一<sup>五</sup> 揃打の交る 鞆の入籠

八  
山

一 柳けくす 花梅葉皮のいふめり

一  
つ

一 雲の野面も 錦を架り

一  
つ



一四

系少ふ後生く改る丁木坂

九 九 九 九 九 九

八子無斤言よ補陀落の声

十 九 九 九 九 九

一被くゝ意むみ扉口子結伽政府

十 十 十 十 十 十

一初物くゝあま田植休る

十 十 十 十 十 十

四雲の志るくゝ改又とる山うら

十 十 十 十 十 十

五執負小身を愛す妹何じまな

十 十 十 十 十 十

一讀ノ意くゝ冊と眼病を多し泣

十 十 十 十 十 十

二他々の美理も玉碎の道

十 十 十 十 十 十

四吉形くゝ様と告るさくし葛

十 十 十 十 十 十

六やまくゝひ鞍杵も志くゝる

十 十 十 十 十 十

一人岸小息も勝乃宵花月

十 十 十 十 十 十

一射留くゝ鯨骨磯小漂

十 十 十 十 十 十

五玉指舟箱根見返る伊豆舟

十 十 十 十 十 十

一神代杉の樞小終る

十 十 十 十 十 十











七四 蜻蛉の一足はくまの相おかし

尺五 盗し牛ふこころは但屋

一 仙家も知る五欲の大瓦更

尺六 着の端ある遠の浮雲

五二 かき兼もやあつ川よあつ澄々

六 一 おくかきく人の志を癒す

三三 文是の口隅に缺ぬ花の友

一〇 風起るうき東園の裏

六 蜻

六 山

六 琴

六 文

フ

フ

フ

フ

完来評  
天 廿九  
天 廿九  
山

地馬琴  
人 廿七  
人 廿七  
文

民玉評

天 七十七  
天 七十七  
羅文

地 廿八  
地 廿八  
蘓山

人 廿七  
人 廿七  
馬琴



判者

蛙水  
零碇

中矣

抵旋  
以極小

賦何駒俳諧之連歌追善之百韻

山音實政九年丁巳春

二月廿二日於曲身

與行同胃十七日於

東定舎并卷也

催主

羅文

馬路今



汗をひらく〜死なむかたの

を忘るる日  
涙を〜く〜

雪

新印〜昔乃。羅文

月日貝

荒多〜川海山の悲 馬琴

旅ゆ〜昔を隣に古垣千 藤山

心立〜とあるし何のぬ 楓庭

地車よ〜つ〜と〜編子川 執筆

自在子城の修護知る

泥屏の背中よな〜と〜と

頭中ゆら〜と〜と



空杯の頻ふ音一筋

本も目足も酒漱の胡嵐

自杭も象子始りも音なき

たけし人の志をいふま

落穂のやりの月のひらね

笈の沸よ無ね乃祢名

蟬窟のくまの月の高

ふか冷きの陣も濁り井

秋深しとんをひまの角力子

係群集もとん神の足

山鳩の報ふとある朝日鏡

横隙もまねの音もなき

西行忌なきとある名もなき

下原の記念も東南の定心

山

文

音

ひ

龍

つ

琴

文

心

琴

文

つ



千綱も恋の居空もはくさる

鄙うくしし君の遊遊

卯せもまきする車内蔵も重

登る鹿の山の拙方うあ

切なぬよ早より替る小松のえ

挙る伴る蟹を重の乳母

棟子俄も石の濱御

年神の蛇と糸る糸糸

ふるまき酒の道後くり

魚つる中を流るる並ふ女

所乃あまをたてし破れ帳

ありくさる着るをさそまお

月のうま子判た松の秋さけ

海を燕の袖をさる風

つ 龍 文 皆 文 七

千綱も恋の居空もはくさる

鄙うくしし君の遊遊

卯せもまきする車内蔵も重

登る鹿の山の拙方うあ

切なぬよ早より替る小松のえ

挙る伴る蟹を重の乳母

棟子俄も石の濱御

年神の蛇と糸る糸糸

ふるまき酒の道後くり

魚つる中を流るる並ふ女

所乃あまをたてし破れ帳

ありくさる着るをさそまお

月のうま子判た松の秋さけ

海を燕の袖をさる風

六 龍 文 皆 山 文 龍



草烟たばこをくぐりて親の尻しりまふ

村も浮麻うまの二日にち法ほを

くし文ぶんの執しやく員いん子こ羅らのら子ことと法ほを

棉わたのの子こ紗さをを鏡かがみ一いち面めん

花はなのの枝えだははああふふ子こを

和わ糸いとのの元もとのの耶や那な

神かみ陀た落らくやや純じゆん正せい井いととたたのの樂らく以い脚かく

慈じ悲ひをを凡ぼん々ざん僧そう正せいのの母ぼ

ああままのの巾きん子こ只ただ一いちつつああるる糸いと車ぐるま

好こののの教きやう入いししくくれれ井いのの器けい

ささるる子こ連れんるる女にょ能のうのの熟じやくええ火か

心こころ二に言ごのの月つき子ことと法ほを

人ひとままのの店みせ花はなももああるるのの像ざう

所ところののぬぬ兒このの髪かみをを子こ巖いん

六 六 七 七 八 八 九 九 十 十  
旋 旋 旋 旋 旋 旋 旋 旋 旋 旋



さし解連のつゆゆるるも糸た二

隙をよまの賦し多きをば

信茂らと知りぬ味是も44の者

大と追とる神名のる

沙舟し用し書し告早し西施乳

二月のけし詩書廟友

糸深の松と自然と浪巻の巻

十能

九文

十文

十能

十能

十文

十能

始香をねむ神伝の洞

正美の伝とそりうよこの脚

物よあら下ひの涌も一井

江戸えんちあ見と十子の籠

子と事ととゆよ小柴さる門

沈登る月も夜別し浦の秋

虫の音やせし冷ししの夜

十能

十文

十文

十能

十文

十能

十能



隅あり夢の玉穂を隠し

僧も驚くと法院は結縁

清海んと山十日の海鶴

又と無教のさしるる世

化やたさく身てつるに古狂

井戸とほるあいの愛も

玉穂の夢を穂葉と桐一葉

山

七

又

十六

十七

十八

十九

誦も果て家に入月

拾りぬく癖さ色拾る月

今も業平と舞うみる僕

言丹より和柔の草よりまゐる星

とつと級巡り礼の物事

智恵も誇る花の言似の文海橋

若荷島よりしし種往は

七

七

七

七

七

七

七



善の園をのこちを解し

十六

朽ぬ古舞の風碑岸の

十七

三度目へ来し新園

十八

恋はりし

十九

居凡る後ちりあ友ら

二十

蝶掃竹し子代の一

二十一

日のおゆりあさむら

二十二

氏安今子心絆の純

二十三

玉藻し後次歌宮名

二十四

蜻干涙まおのる

二十五

あまのゆや栗と

二十六

仄る降粉あ光

二十七

暮るる

二十八

笑ひし

二十九



宮家の御筆又後つ梅十七文

自撰なうら子厚句十六文

十のうら子平文寸

葛の浦箱外

微雨存香

あまをさし御月

追善も既不投

○故人看識

代後山十六文

名歌天日

人一

地三

水天

人七



完事評

月次第二席

誹諧百韻

寬政十年戊午正月十六日

各十九出

余執筆持

英主

羅文

蘆山  
孤旋  
逸醒  
馬其乃  
右中少少公長

一八

*[Faint red and blue ink bleed-through or ghosting of text from the reverse side of the page]*



二  
こよ〜時如〜

羅文

花の種蒔〜

餅 砵

二  
去〜を〜の〜

一  
お宿座の魁おもあ〜

とれ〜を〜の人〜

一  
小結紗を粧む席画の刷毛廊

かくてハ籠も世は籠りし

一  
ぬる萩のはし河をい〜

一  
相撲櫓乃大鼓不の〜



様方のひびき〜ひびき市のみ

二 羅文

ねむとろの〜〜様方ろあふ

三 藤山

一 日暮〜あふ〜紀念のテト

一 深美

卯の木の〜〜意のゆき

孤化

四 夕を〜〜〜鞠のあふ

二 遊

一 清小七年焼友を紙造

二 山

一 波濤の〜〜〜出秋のあ

二 花

一 厚厚ゆる科斗の碑

一 三

一 難人の雲流も〜〜

一 7

一 袖香胞〜〜消〜灰占

二 文

一 高杉石〜〜流り風神

二 文

一 天宮い〜〜音響の咽

二 文

一 道標〜〜〜三原の願

二 文

一 毛鳥も〜〜朝のいよあ

一 7



一 日の月夜切の月まらも

一 海心まき風のまらも

二 実相の家一弘誓のあし

一 ありさきし人服を家たす

一 南文字知しぬ年ハしき

一 山車も地震のあまの供て

二 碑

二 台

二 山

二 山

二 山

二 山

二 山

一 牡丹おしきまらぬ墓

一 首もろく(中尉)のあまの供て

一 稻のもろく種まきもあま

一 水戸川も漏水を平おまけ

一 水戸川も漏水を平おまけ

一 首飾の月のまらもあま

一 水戸川も漏水を平おまけ

二 寺

二 寺

二 寺

二 寺

二 寺

二 寺

二 寺



川等の秋も木のけし木のお

一 剛よゆんと常夜法まあり

二 八のまきい麻ぬ人の小長衣

一 破き肩のひきつりい移さ

一 如くゆる宮の階りゆい

一 鳥もささくし鶴の子はひ

一 朝のたげさよくの鳥よちん丸

九 考

九 考

六 文

五 碑

十 山

十 山

五 考

一 吾公馬の牙のあれ編笠

一 足らうもわりの利敷は袖のぬ

一 月夜後くは柿のえんま

一 ちきあうまを啼止を鈴

一 秋やうまをくや書葉の若

一 花の紋とくくのほほま

一 菊のちやをとも田芥一花

六 考

六 考

七 文

六 山

六 山

六 山

六 山



新尼の香ニツラツル

一 近郊の山郡の湯に

一 若井と改めらるに凡こひまふ

六 其ころのこゝに孤離ぬる

一 幸ふくもつ母後のころ響国境に

一 故よりもつ侍をの侍に

一 古儀や山坂公の侍の山坂

此 七 八 七 七 七 七 七 七

一 風をうらうらと乞食一様

一 梅も矢く紅みよ

五 入院をすうちをの法華

四 雪の淵の白糸や解

一 月よ梳せり湯うすの簾

一 忘人も月も何れも定の家

一 新くもつ海河利

七 七 七 七 七 七 七 七



秋の夜更に水音もく

古尾 堀の院

若葉のさけまきゆく

又ふれの殿の脚き行侍

杉凡よ啼きき清く村のる

授有群いし里とをみる

平歩子詩伴もかきまをるを指さ

た

ハ

九

山

山

山

文

一 酒くあらしし 泊の舟程短

五 蠅帳の編み糸も 浅く甚の月

かきぬ川炬をを夜更のこえ

六 依不而児う 栗の洞とくづを

一 歌をとらふは 櫛子ののちを

一 ぬくは 遠くはる 花錦

一 西の空を 暮のやう

た

つ

山

た

た

た



二 毎夜夢に我を交へて御山

任の名は成りては玉人

一 車より袖をぬ轄井子入ら

一 堂の平を小にさるる序

一 時をらする山の煙

一 海太心に石をさすあま

一 振おとすと松の葉のいろが

山

十

十

十

十

十

碑

九

十

十

十

十

一 日毎に田路を歩み宿を

一 日毎に歩み宿を歩み宿を

一 文月れ新しきまに心あ

一 奇敷し麻を扱ふ

一 志らぬもちり松の片を

一 三とせをさるる使るる

一 志らぬもちり松の片を

一



五

雨レのレ勢ノのレつマはスるニ高ク勢ニもト

勢ノのレ存トもレ此ノつレれニハ

造ルはレ海ノ海ノはレ沙ノのレ野ノ

宮ノ及ビ堂ノとシてレ持ク物ノをレ

引キあハいノ等ノのレ人ノもレあハいノるカはスるハ

うレがレ物ノをレとシてレ場ノをレ

内ノのレふレのレやレあハる花ノのレ幕一を

草ノのレきノもレ子ノ氏ノのレ及ビ也

五

礎

十  
七

十  
七

十  
七

十  
七

十  
七

十  
七

十  
七

草ノノ

地ノノ

草ノノ

人ノノ

草ノノ

天ノノ

天ノノ

天ノノ

天ノノ



判官宛來

字為其年二卷

賦行衣詠詩連歌百韻

戊午年...

...

...











年々銀山に川をけり

里見れ城れあゝ磯

おめあゝん心は昔来海より

今おぼろすこみお座の物

舞れ舞より出れ物あそ

呼吸する人あそ人

川流る方香岸れ濱

常七おれおれ福を醒

又一おれおれおれおれ

落るおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれ

春の心もおれおれおれ

稲目れおれおれおれおれ

秋一おれおれおれおれ

夫

福

文

文

文

文

文

夫

文

文

福

文

夫



暮らさしを降すのち後

長女の娘の無思深きゆら

川列さくねるうらみはあま

脱すも重きも糧ハこそ

ままの形あそび丸鏡

まの居る片あつこのれ

月降す芽の梅を踏む日の光

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三 松のまふ越へん流流あふ

四 吟の無画後のおを証得也

五 十二れとらんえりる早敷

六 物ありし理れ牛の毛吹く

七 新措しむる若き月の

八 是の山割る隠し

九 ころもめし湯保の

十

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六







五 此れとたつたてのまゝに

六 さらさらと流るる水

七 ようきとてまゝに流るる水

八 流るる水とてまゝに流るる水

九 流るる水とてまゝに流るる水

十 流るる水とてまゝに流るる水

十一 流るる水とてまゝに流るる水

五 流

六 流

七 流

八 流

九 流

十 流

十一 流

十二 流るる水とてまゝに流るる水

十三 流るる水とてまゝに流るる水

十四 流るる水とてまゝに流るる水

十五 流るる水とてまゝに流るる水

十六 流るる水とてまゝに流るる水

十七 流るる水とてまゝに流るる水

十八 流るる水とてまゝに流るる水

十二 流

十三 流

十四 流

十五 流

十六 流

十七 流

十八 流



十  
我の愛の流るる川をよ  
山をよ

同くはしむる友

五  
白雲の池子又流るる水

三  
向ふの岸を以て流るる

十  
十の川の流るる物

一  
雲の川

五  
雲の川

又

又

又

又

又

又

又

又

一  
船一ちりちり之の浪

五  
あはれなるもの

一  
犬放油一山喜輝く

五  
雜抱子

一  
山喜輝く

三  
松風の市

一  
万里の

又

又

又

又

又

又

又

又







字為月次初席

禱將連行百韻

禱將

羅文

子名

戊午年四月

名九

物

筆







五 家とてんたをききし後より

二 少くもあはれ心の本のきき

五 卷と向れ後とてんたのきき

二 娘のちき余をほりて飲

一 烟物よしある中の飲を

一 形なくの形とてんた

二 毛もれ首飾とてんた

初坊

二 屋文

二 坊

二 坊

二 文

二 坊

二 坊

一 夜にききし人

二 毛のききし人

二 本細刻院とてんた

一 市人か袖のききし人

一 泣きしとてんた

二 毛のききし人

一 毛のききし人

坊

二 坊

二 坊

二 坊

二 坊

二 坊

二 坊



五

第廿一のふしから終り迄終つれ

終

二

行内流し〜〜〜

坊

連國の四〜〜〜小峰

菜

二

志まのち〜〜〜

筆

戸を〜〜〜

名

一

終り〜〜〜

史

二

〜〜〜

名

五

終り〜〜〜

名

いつ〜〜〜

名

終り〜〜〜

名

〜〜〜

名

七〜〜〜

名

終り〜〜〜

名

〜〜〜

名



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

六

八

八

八

八

八

八

八

八

八

八

八

八

八



天詩舫

羅文

年心年

月次多之

謝語連歌百韻

中神多下

名中

由亭

四十四

此芳名

二十

人

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*



涼しき花

いざよひ

聲のしほき

ふし

想はふし

竹根のふし

庭のふし

秋涼石のふし

いづれは

いづれは

いづれは



一 山崎の歌集

二 山崎の歌集

三 山崎の歌集

四 山崎の歌集

五 山崎の歌集

六 山崎の歌集

七 山崎の歌集

八 山崎の歌集

九 山崎の歌集

十 山崎の歌集

十一 山崎の歌集

十二 山崎の歌集

十三 山崎の歌集

十四 山崎の歌集

十五 山崎の歌集

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎



詩 沙百子粘く 海ののりのま

一 三三三 梓の 三三三

一 一 菱の 都の 川の 味を

一 酒の 磯の 三三三

一 一 本の 三三三

一 一 三三三

一 一 日の 夜の 鞍を 尾を 打た した

一 一 川を 流す 舟を 流す

一 一 三三三

一 一 三三三

一 一 三三三

一 一 三三三

一 一 三三三

一 一 三三三

三

文

文

文

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山







一 糸状の子心依の思ひのしるしなり

一 古扇の縁のまわりのしるしなり

一 飛ぶとらね疲痛を述べたり

二 母の湯のいじりしるし

三 女心と五重と別な流しなり

又 手書きの文とけしみの愛

一 しのぎのしるしなり

一 控の袖と孫のしるし

分 白蛇のしるし

回 白蛇のしるし

一 しのぎのしるし

一 柵のしるし

一 七葉のしるし

一 白蛇のしるし

九

九

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十



又 味あし〜とらたを越えり。一

一 城のちびつらき

一 振子長付の御座も水子あり

一 古の宿りなまの御入時。

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハルのさそひ

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル

一 一 ちりちりハルハル















Blank page with faint bleed-through from the reverse side.

Blank page with faint bleed-through from the reverse side, including the word "Mack" and other illegible characters.



